

術前食道がん患者の抑うつ傾向と心理的適応に関する因子

伊藤真理¹⁾、廣川万里子²⁾、市川あい³⁾、足羽孝子²⁾、前田直見³⁾、田辺俊介³⁾、野間和広³⁾、白川靖博³⁾、藤原俊義³⁾

- 1) 岡山大学病院 看護部
- 2) 岡山大学病院 周術期管理センター
- 3) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器外科

【緒言】当院の周術期管理センター（以下、PERIO）術前看護外来では、食道がん患者を対象に、手術に向けた身体的および心理的準備を行っている。しかし、がん患者の手術に向けた心理的適応の実態やその影響因子は明らかになっていない。そこで本研究は、術前食道がん患者の抑うつ傾向の割合と心理的適応に関する因子を明らかにし、術前看護への示唆を得ることを目的とした。

【研究方法】1. 対象：2015年4月から2015年12月までに岡山大学病院で食道がん手術を予定している患者。2. 方法：調査期間中に対象者が術前看護外来を受診した際、看護面談の前に「つらさと支障の寒暖計」を用いて抑うつ傾向を、日本版 **Mental Adjustment to Cancer(MAC)**を用いてがんに対する心理的適応を測定した。また、手術入院の入院当日に再度「つらさと支障の寒暖計」を用いて抑うつ傾向を測定した。

【分析方法】つらさと支障の寒暖計のカットオフ値を上回ったものを抑うつ傾向ありに分類し、外来時と入院時の変化を単純集計した。心理的適応に関する因子としては、年齢、性別、職業、配偶者、術前化学療法、過去のがん罹患、がん闘病経験のある知人、抑うつ傾向の有無について、各々 MAC 得点〔下位項目 **Fighting Spirit(FS)**と **Helplessness/Hopelessness (H/H)**〕の差を Mann-Whitney *U*検定で比較した。

【倫理的配慮】本研究は岡山大学病院看護部倫理委員会の承認を得て行った。研究対象者に研究参加および撤回の自由、個人情報の厳守について説明し、自由な意思選択の下、同意と署名を得た。

【結果】対象者は33名で平均年齢は66.2±9.2歳、男性26名、女性7名であった。術前看護外来から手術までの日数は平均32.2日であった。術前の抑うつ傾向は、術前看護外来前で6名（18.2%）、手術入院日で7名（21.2%）であり、割合に差はなかった。外来時と入院時の両時点で抑うつ傾向の患者は3名（9.1%）であった。

心理的適応に関する因子としては、65歳以上の高齢者の FS 得点が有意に高く（ $p = 0.009$ ）、H/H 得点にも高い傾向があった（ $p = 0.053$ ）。

【考察】術前看護外来前とその後の入院時の抑うつ傾向の比較では、明らかな改善・悪化傾向は認めず、PERIO 看護師が説明している術後の身体的変化や多数のルート類の説明が抑うつ傾向を促進する因子にはならない可能性が示唆される。先行文献では、FS と H/H には負の相関が報告されているが、本研究では FS の高い65歳以上の高齢者群の H/H が低いという結果ではなかった。このことは、手術に前向きに取り組もうという気持ちと自分ではどうしようもないという気持ちの混在が考えられ、術前看護外来において患者が取り組むべき課題を示す重要性が示唆される。

文献

- 1) Akizuki N, Yamawaki S, Akechi T, et. al : Development of an Impact Thermometer for use in combination with the Distress Thermometer as a brief screening tool for adjustment disorders and/or major depression in cancer patients. J Pain Symptom Manage 29:91-9, 2005.
- 2) 明智龍男、久賀谷亮、岡村仁、他 : Mental Adjustment to Cancer (MAC) scale 日本版の信頼性・妥当性の検討. 精神科治療学 12 (9) ; 1065-71, 1997.